

## ピートモスの敷料利用について

誌名	千葉県畜産センター研究報告 = Bulletin of the Chiba Prefectural Livestock Experiment Station
ISSN	03865673
著者	大泉, 長治 岡田, 光弘 高山, 文雄
巻/号	9号
掲載ページ	p. 100-101
発行年月	1985年10月

## ピートモスの敷料利用について

大泉長治・岡田光弘・高山文雄

### Bedding Utilization of Peat Moss

Choji OHIZUMI, Mitsuhiro OKADA and Fumio TAKAYAMA

#### 目 的

肥育牛舎においては、敷料を利用する畜舎構造の例が多く、敷料としてオガクズを利用するが多い。しかし、近年オガクズの価格の高騰や絶対量不足による入手難から、オガクズに替るものとして、モミガラなどの敷料利用に関する試験が数多くなされている。

本報では、敷料としてピートモス（カナダ産）の利用を試み、その結果を報告する。

#### 方 法

試験を実施した牛房は、1牛房の面積が $32.4\text{ m}^2$ （ $4.5 \times 7.2\text{ m}$ ）で、床面はコンクリート製である。12ヶ月令の去勢ホルスタインの肥育が行なわれており、牛は1頭ごとに鎖で繋留し、1牛房に4頭が飼養されていた。敷料の散布面積は牛の行動範囲内とし、 $12\text{ m}^2$ （ $6 \times 2\text{ m}$ ）とした。対照区としてオガクズを敷料とした区を設け、ピートモス区、オガクズ区とも敷料の重量は現物で $40\text{ kg}$ （1頭当り $10\text{ kg}$ ）とした。

敷料の水分の変化は、24時間ごとに全量を混合して試料を採取し、測定を行った。試料採取後の敷料は、再度 $6 \times 2\text{ m}$ の面積に均一になるよう散布した。

調査期間は昭和59年11月13日～11月16日で、その間の舎内の気温は $9 \sim 12^\circ\text{C}$ 、相対湿度は $55 \sim 95\%$ の範囲で変化した。

#### 結 果

敷料の水分の変化を図1に示した。オガクズ区は、開

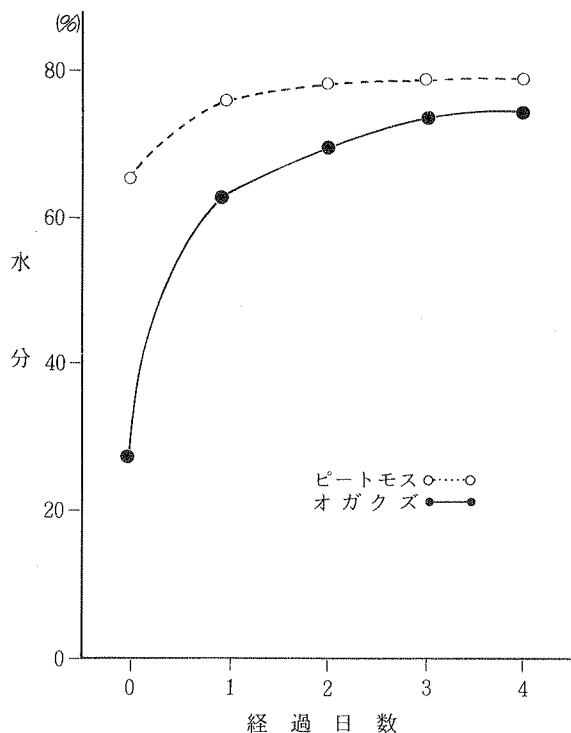


図1 敷料の水分の経時変化

始時の水分 $26.95\%$ 、24時間後 $63.11\%$ 、48時間後 $69.13\%$ 、72時間後 $73.09\%$ 、96時間後 $75.11\%$ と変化した。24時間後の水分 $63.11\%$ 時点では、牛体の汚染もなく、継続使用に耐える範囲のものであった。48時間後の $69.13\%$ 時点では、一部のふん尿による汚染の激しいところを除かないと、望ましい状態が維持できないものと思われた。72時間経過時点では、牛体の汚染が始まり、敷料の交換時期と思われた。この時の敷料の水分は $73.09\%$ であった。

ピートモスを敷料として用いた区は、開始時の水分が $65.00\%$ 、24時間後 $75.85\%$ 、48時間後 $77.77\%$ 、72時

間後 78.66%、96時間後 79.08%へと変化した。24時間後では、継続使用に耐える範囲のものであったが、48時間後では、牛体の汚染、牛の横臥や起立時に肢蹄の滑りが観察され、交換時期と思われた。

堆肥化の際に用いる水分調整材の選択に際し、最大含水量が一つの指標になると考えられている。最大含水量は今回用いたピートモスで 1455%、オガクズで 399%であり、ピートモスは、敷料の素材としても勝れていると思われたが、流通段階で 65%程度の水分を含んでいるため、敷料としてオガクズと同重量で用いた場合オガク

ズより交換時期が早くなった。また価格についても、オガクズより高価であった（昭和59年11月調べ）。

以上のことから、ピートモスを敷料としてその利用を考える場合、水分含量や価格面で今後検討すべき問題が残されているものと思われた。

本研究の実施にあたり、心よく牛舎および供試牛を貸与くださり、適切な御助言と御協力をいただいた千葉県畜産センター肉牛研究室長 高梨 勝氏ならびに同研究室員の方々に心より御礼申し上げる次第である。